

行為論二題

I 行為の構造——理由と表出——

ある人が強盗に襲われた、とする。彼は確かにその強盗の顔をしっかりと認識し、覚えていた。しかし彼はそれを言葉でうまく表現することは出来ない。「細面で、色白で、狐目で、……」といった人相の特徴くらいしか、言葉で表現出来ないのである。かといって彼は、画才がないので、その顔をうまく描く事も出来ない。しかし、警察が沢山の顔写真を持ってきたので、その中から一枚を「これだ!」と言って選び出す事が出来たのである。

黒崎 宏

この場合、彼は確かに犯人の顔をしっかりと覚えていて、という確信があった。そしてこの事は、沢山の顔写真の中から一枚を確信を持って選び出す事が出来た、という事によつて証明されたのである。この事は何を物語っているのであろうか。それは、犯人の顔を覚えていて、という事は、犯人の顔を選び出す事が出来る、或いは、犯人の顔を確認する事が出来る、という事と、概念上独立ではない、という事である。如何なる仕方においてであろうとも、犯人の顔を確認する事が出来ないならば、彼の「犯人の顔を覚えていて」という確信は、妄想であつたのである。少なくとも、そう言われても仕方がない。抗弁の余地がないの

である。

そうであるとすれば、今の例で「覚えていたから、選出す事が出来た。」とは言えるとしても、それは、概念上の関係（ウィトゲンシュタイン的に言えば、文法上の関係であつて、法則上の関係ではない事になる。法則上の関係であるならば、前件は後件と概念上独立でなければならぬ）からである。

さて、「覚えている」という事には、何らかの構造があるであらうか。もし「覚えている」という事に何らかの構造があるとすれば、当然、それは法則に支配されている事になる。何故なら、構造があれば部分が有り、部分があれば相互作用があり、相互作用は法則に支配されているから従つて当然、「覚えていたから、選出す事が出来た。」という事も、法則上の関係にならなくてはならない。しかし「覚えていたから、選出す事が出来た。」という事は、いま述べたように、概念上の関係——文法上の関係——なのである。そうであるとすれば、「覚えている」という事は構造はない、あつてはならない、という事になる。したがつて「覚えている」という事——「記憶」——は事象ではない、という事にならう。構造のない事象は、考えられ

ないからである。事象はその周辺と何らかの相互作用をする。そしてこれは、構造無しには不可能であらう。

次に同じ論点を、別の観点から「意図」を例にして考えてみよう。

「意図の意識」とは「意識された意図」の事である。ところが、意識された意図——即ち対象化された意図——は、実は意図ではない。これには、少なくとも二つの理由がある。

- (1) もし意図が意識され得るとすれば、その意識された意図に従うか否かが、改めて問題となる。したがつて意識された意図は、行為とは直接関わる事が出来ない。この場合、行為と直接関わるのは、意識された意図に従うか否かの決断であり、この決断自体は、意識されてはならないのである。それは、行為において示されるだけなのである。さもないと無限後退に陥るから。これは、意図は本来意識され得ないものである、という事を物語っている。したがつて、意図と意識された意図は同じではない。

(2) もし意図が意識され得るとすれば、その意識された意図には純粋な持続がある。しかし、意図には純粋な持続が存在しない。したがって、意図と意識された意図は同じではない。

そしてこの事は、意図は事象ではない、という事を物語っている。

意図は事象ではない、という事は次のようにしても証明出来る。

もし意図が事象であるとすれば、意図は偶然的法則に従うことになる。すると、可能世界 W_1 では意図Aから行為Aが生じ、別の可能世界 W_2 ではその同じ意図Aから行為Aが生じる、という事が可能である。しかし意図がどういう意図であるかは、それから生じる行為によって決定される。したがって、或る可能世界 W_1 では意図Aは意図Aであり、別の可能世界 W_2 ではその同じ意図Aが意図Aである、という事が可能となる。即ち、「意図」はrigidではない(指示を固定しない)、という事になる。しかし「意図」は、本来rigidな(指示を固定する)ものである。それ故、もし意図が事象であるとすれば、意図はrigidであり、かつrigid

ではない、という矛盾が生じる。したがって、意図は事象ではないのである*。

*この証明は次の論文に負っている。

N. Malcolm, *Intention and Behavior*, in *The Philosophy of G. H. von Wright*, (eds.) P. A. Schilpp and L. E. Hahn, Open Court, 1989.

意図は事象ではない。そして同様に、意味、欲求、規則、知識、信念、目的、技術、経験、等々も事象ではない。これらは、言わば、身についたものであり、本来意識出来ないものなのである。

実は、身についたものは本来意識出来ないものなのであり、その意味で、意識に対して「透明」なのである。我々は、眼鏡はもちろんのこと、肉眼も、視神経も大脳も見えない。それらは、見るという本来の仕事に関しては、透明なのであり、また、透明でなくてはならないのである。何故なら、そうでなくては「見る」というそれ本来の機能を十分に果たし得ないから。同じ意味で、例えば探り棒で地面を叩くとき、そこに感じられるのは地面の硬さであって、

探り棒自体は透明であり、また、透明でなくてはならない。この場合、勿論、探り棒を持つてゐる手も透明なのであり、また、透明でなくてはならないのである。更に言えば、その本来の機能を果たしているときには、身体も透明なのであり、また、透明でなくてはならない、と言えよう。勿論我々の身体は、普通の意味では透明ではない。しかし身体というものは、外から見られるためにあるのではないのである。

さて、この「透明」という比喩を用いれば、事象ではない意図、意味、欲求、規則、知識、信念、目的、技術、経験、等々も、透明なのである。そして我々の行為は、透明なこれらに基づいて、行なわれるのである。意図について言えば、意識出来ない意図——透明な意図——に基づいて、行為は行なわれるのである。

しからば、行為というものは意識出来ない——透明なものから生まれるのであろうか。或る意味では、その通りである。行為は、例えば、意図から生まれるのである。しかし実は、行為は事象であるのに、意図は事象ではない。したがって、ここで「生まれる」という言葉を用いるのは、本当は適當ではない。行為は、当人によつて、まさに行な

われるのである。そして、その理由が求められれば、そこで初めて「意図」が語られるのである。したがって、意図は行為の原因ではなく、理由なのであり、行為は意図の結果ではなく、表出なのである、と言えよう。

Ⅱ 行為と慣習——「私的行為は不可能である」——

行為の問題を考えると、必ず直面せざるを得ない問題は、目的とか規則とかを念頭に思い浮かべるとき、その念頭に思い浮かべられたものと当の行為との間の関係を如何に理解するか、という問題である。何故なら、この場合、念頭に思い浮かべられるものも行為も、ともに何らかの事象であり、したがって我々は、事象間の関係の問題に直面しているわけであるから。ヒュームによれば、事象間には必然的關係は存在し得ない。そこに存在し得るものは、偶然的關係のみなのである。ところが、目的とか規則とかと行為の間の關係は、偶然的關係ではあり得ない。かくして我々は大変困難な問題にぶつかる、というわけなのである。この問題は、ウィトゲンシュタインによつて、『探究』

において以下のように論じられた。但し、話を具体的にするために、次のような場面を想定する。

私は京都へ行こうと思っていた。目的地は京都である、というわけである。私は或る丁字路にぶつかった。そこには道しるべが立っていて、右向きの矢印の下には「京都」、左向きの矢印の下には「伊勢」と書いてあった。それを見て私は、躊躇なく右折した。即ち、私の行為は私の目的、その道しるべによって、決定されたのである。

この例では、規則の代わりに道しるべが用いられている。しかもそれは、念頭に思い浮かべられるのではなく、感覚的に見えるのである。そしてこの方が、むしろ問題を明確にするであろう。

ワイトゲンシュタインは先ず次の様に問う。

規則の表現——例えば、道しるべ——は、私の行為と如何に関わっているのか。両者の間には如何なる結合があるのか。(第一九八節)

そして、次の様に答える。

私はこの記号に対して一定の反応をする様に訓練されている。そして、私は今その様に反応するのである。

(第一九八節)

この答えに対しては、次の様に反論されるであろう。

その様な答えだけでは、君はただ、「両者の間の」因果的結合を述べているだけであり、また、如何にして我々は今や道しるべに従うという事になったのかを説明しているだけであって、この記号に従うという事が本来何において成り立っているのか「という、この記号に従うという事の内的メカニズム」を述べてはいない。(第一九八節)

これに対し、ワイトゲンシュタインは答えて言う。

そうではない。私はまた次の様な事をも指摘したのである。人は、道しるべの恒常的使用、道しるべの慣習、が存在する限りにおいてのみ、道しるべに従うのである。(第一九八節)

私は道しるべに對して「一定の反應をする様に訓練されている」という事は、一定の目的のために道しるべを立てるという慣習が、私が生活しているこの社会には存在するからに他ならない。その様な慣習が存在しない社会においては、^{*}道しるべなるものは存在し得ないであらう。

^{*}慣習は、現実には存在しなくても、概念的に存在していればよい。例えば、西欧には「切腹」という慣習は存在しない。したがって、日本の「切腹」という慣習が知られていなかった時代に、西欧で誰か或る一人の人が切腹をした、という事はある得ない。そもそもその時代には、「切腹」という概念がまだ存在しなかったのである。これに對し現代では、日本には「切腹」という慣習が存在する、という事が知れわたっている（としよう）。したがって現代の西欧には、「切腹」という慣習こそないが、「切腹」という概念は存在する、と言える。そしてこの状況においては、西欧で日本人ではない誰か或る一人の人が切腹をした、という事はある得るのである。彼は、自分が西欧における「切腹」の第一号である、という自覚を持って、切腹したのであり、西欧の人々もそれを認めるであらう。

そうであるとすれば、人が「道しるべに従う」という事は、その社会における「道しるべに従う」という慣習を實踐している事に他ならないのである。そしてこの事は、ただ単に「道しるべに従う」という事のみについて、ではない。ウィトゲンシュタインは、次のように言っている。

規則に従うという事、報告をするという事、命令を与えるという事、チェスをするという事、これらは慣習（恒常的）使用、制度である。（第一九九節）

例えば、「規則に従う」という事は「規則に従う」という慣習の實踐なのである。かくしてウィトゲンシュタインは、次のように言うのである。

「規則に従う」という事は「^{*}解釈ではなく、「規則に従う」という慣習の」実践である。そして、「そのような慣習から離れて、ただ」規則に従うと信ずる「だけの」事は、規則に従う事ではない。そしてそれ故、人は「規則に従う」という慣習から離れて、ただ」規則に「私的に」従う事は出来ない。何故なら、さも

ないと、規則に従うと信ずる「だけの」事が、規則に従う事と同じになるうから。(第二〇二節)

『探究』のこの部分は、「私的言語は不可能である」という事の核心を述べているものと見なされる事が出来る。しかし実はこの部分は、ただ単に言語のみに関わるものではない。ここで述べられている事は、規則に従う事のみならず、報告をする事、命令を与える事、チェスをする事、……といった行為全般についても妥当するのである。即ち、ここで述べられている事は、「私的行為は不可能である」という事を述べているものとも見なされ得るのである。ウイトゲンシュタインは『青色本』において、次のように言っている。

私はチェスをしようと思う。ところが或る人が白のキングに、その駒の使用には何の変化も与えずに、紙の冠をかぶせる。そして私に言う。このゲームにおいてこの冠は、彼にとつて、規則によつては表現不可能な意味を持っているのだ、と。私は言う。「その冠は、その駒の使用を変えない限り、私が意味と呼ぶものを

持つてはいない。」(六五頁)

ここにおける「白のキングに紙の冠をかぶせる」という行為は、「私的行為」であろう。それは、実は、「行為」と言われるべきものではないのである。